

Title	心理動詞構文における逆行照応について
Author(s)	高木, 宏幸
Citation	Osaka Literary Review. 34 P.98-P.108
Issue Date	1995-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25372
DOI	10.18910/25372
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

心理動詞構文における逆行照応について

高木 宏幸

0 序

目的語に経験者をとるタイプの心理動詞構文については、さまざまな特徴的なふるまいが注目されてきたが、その中で特に興味深いのはこの構文が典型的に許す「逆行照応」の現象である。

- (1) a. *Pictures of himself_i don't portray John_i well.
b. Pictures of himself_i don't bother John_i.

心理動詞構文である (1b) では主語内にある *himself* が目的語を先行詞としているが、(1a) に見るように、このような「逆行照応」は通常許されない。生成文法の枠組みでさまざまな提案がなされているが、必ずしも妥当なものとは言えない。本稿では Kuno (1987) に従い、照応形を Empathy 表現とみなすことにより、機能主義的アプローチがこの現象を自然な仮定のもとづいて説明できることを示して行く。近年、統語的制約は項位置にある照応形に限られ、非項位置にあるものは談話の原則にコントロールされるという見解が指示を得つつある。本稿の目的は、少なくとも非項位置の照応形については、Empathy (あるいは「視点」) の原則がはたらいていることを、心理動詞の逆行照応現象を具体的に分析することによって示すことである。

まず、1 節で統語的説明のひとつとして Pesetsky (1995) による説明を概観し、その問題点を指摘する。2 節で Kuno (1987) の Empathy 理論を概観し、照応形がその中でどのように扱われるかを見た後、3 節でそれを逆行照応現象に適用する分析を行なう。4 節では受身文について検討する。

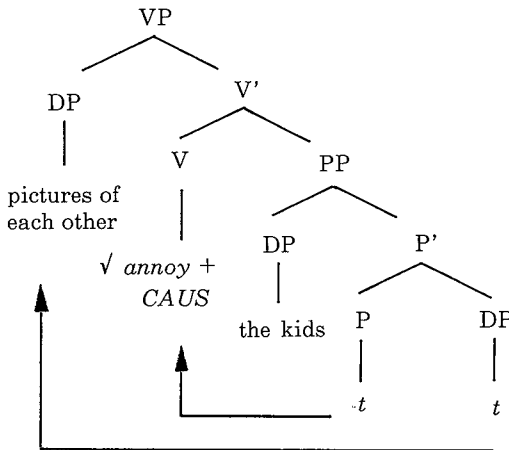
1 統語的説明とその問題点

1.1 Pesetsky (1995)

Pesetsky (1995) は、心理動詞構文が *Causer* の意味をもつことに着目し、さまざまな理由から *Cascade* と呼ばれる独自の D 構造を仮定する。逆行照応を許す (2) の派生を (3) に示す。

(2) Pictures of each other_i annoyed the kids_j.

(3)



“Causer”である *pictures of each other* は音韻的に空のゼロ形態素である前置詞 *CAUS* の補部として生成され、VP 指定部（主語の位置）に繰り上がる。また *CAUS* は [+affix] であるとされ、V の接辞となり、*annoy* に “Cause” の意味をもたらす。詳細は Pesetsky (1965) を参照されたいが、重要なことは、この派生では、D 構造において目的語 *the kids* が主語 *pictures of each other* を c 統御していることである。Chomsky (1981) は照応形に関わる束縛条件 (A) を次のように規定する。

(4) 束縛条件 (A)

照応形は統率範疇内で束縛されていなければならない。

ここで、 α が β を束縛するとは、 α と β が同一指標をもち、 α が β を c 統御することをいう。束縛条件 (A) が D 構造でも適用されるとするならば、先行詞が照応形を c 統御する (3) の派生によって逆行照応が説明されることになる。

このように、生成文法の枠組みにおける研究では、派生のある段階で照応形が先行詞によって c 統御されていることを示すことによって、逆行照応を説明しようとするものが主流を占める。¹⁾

1.2 統語論的説明の問題点

以上のような統語論的説明には、Causer のみをもっとも下位の位置に生成される点が独立した動機に乏しい (高見1995) うえ、説明できない例が多く存在する。

統語的な説明には、同じ θ 役割をもつ要素は D の構造において同じ構造関係によって 標示される、という前提が必要になる。²⁾ つぎの例を見てみよう。

(5) a. *Pictures of himself_i; don't portray John_j; well.

b. To John_i's disgust, a story about himself_i in the Boston Globe portrayed him_j as a small-town politician.

(Kuno and Takami 1993)

この例では、*pictures of himself* あるいは *a story about himself in the Boston Globe* は共に同じ θ 役割をもっと考えられるが、逆行照応の可否に違いがある。これを説明しようとする、同じ *portray* という動詞を用いていながら、(5a) ではその主語は D 構造で目的語に c 統御されない位置にあり、(5b) ではそのような位置になければならず、明らかに不自然である。このように、純粹に統語理論だけで逆行照応の現象を説明するのは

無理があると言わざるを得ない。

2 Empathy あるいは「視点」

2.1 Kuno (1987) の Empathy 理論

ある事態を言語であらわすとき、話者はその事態のある参加者に近い「カメラアングル」をとって表現しようとすることがある。この「カメラアングル」を Empathy と言い、Kuno は次のように定義している。

- (6) Empathy とは、ある文において話者が記述する事態や状態に参加する人や物に対する、話者の自己同一視化の度合である。

(Kuno 1987: 206)

Empathy (以下「視点」とする) が関係する現象を見て行こう。

- (7) (Mary had quite an experience at the party she went to last night.)
- a. She slapped an eight-foot-tall boxer in the face.
 - b. *An eight-foot-tall boxer was slapped in the face by her.

一般に話し手は初めて談話に登場する対象よりもすでに談話に存在するものに視点を置きやすい。これを Topic Empathy Hierarchy (TEH) という。 $E(x) > E(y)$ が「 y よりも x に近いの視点が取られる」ことをあらわすならば、(8) が成り立つ。

- (8) TEH : $E(\text{discourse topic}) > E(\text{non topic})$ ³⁾

(7) では、*Mary* が先行談話の主題であるから、*Mary* に視点が置かれることが求められる。

また、一般に文は主語 NP の指示対象に視点を置いて発話されることが知られている。これを Surface Structure Empathy Hierarchy (SSEH) と呼ぶ。

(9) SSEH: E (subject) > E (other NPs)

以上を踏まえると、(7) の各文の視点関係は次のようになる。

(7a) TEH : E (Mary) > E (an eight-foot-tall boxer)

SSEH : E (she = Mary) > E (an eight-foot-tall boxer)

(7b) TEH : E (Mary) > E (an eight-foot-tall boxer)

SSEH : E (an eight-foot-tall boxer) > E (Mary)

(7a) では視点関係に矛盾は生じていないが、(7b) では矛盾しており、次の制約によって、容認度の違いがとらえられる。

(10) 同一文内で視点関係は矛盾してはならない。

しかし、この議論に従えば、つぎの例は誤って容認されないと予測してしまう。

(11) (Mary had quite an experience at the party she went to last night.)

An eight-foot-tall rowdy harassed her.

(7b) の例と同じように、TEH により E (Mary) > E (an eight-foot-tall rowdy)、SSEH により E (an eight-foot-tall rowdy) > E (Mary) が得られ、これらは矛盾する関係だからである。

この問題は、(7b) が受身文であり (11) が能動文であることに起因する。受身文はその主語に視点を置くための意図的な有標の構文であり、能動文は無標である。そこで次のような制約を設ける。

(12) 談話法規則違反のペナルティー：談話法規則の「意図的」違反に対しては、そのペナルティーとして文の不適合性が生じるが、その「非意図的」違反に対してはペナルティーがない。

(久野 1978: 39)

2.2 再帰代名詞と視点

再帰代名詞（相互代名詞を含む）の照応に「視点」が関与していることを述べた文献⁴⁾は多い（Kuno (1987)、Sells (1987)、Zribi-Herts (1989) など）。Kuno に従って、次のように仮定する。

- (13) 再帰代名詞の視点制約：再帰代名詞を含む文は、その指示対象に視点を置いてものでなければならない。

この仮定の根拠を見て行こう。一般に、再帰代名詞は主語を先行詞とするとき、もっとも容認度が高く、日本語では通常「自分」の先行詞は主語に限られるようである。

- (14) a. John_i talked to Mary about himself_i.
 b. √/? John talked to Mary_i about herself_i (Kuno 1987)

- (15) 太郎_iは 花子_jに 自分_i/_{*j}について 話した。

この事実は、主語の指示対象に視点を要求する SSEH と (13) の制約によって予測される。また、つぎの例を見てみよう。

- (16) a. √/? Mary talked to John_i about himself_i.
 b. *? Mary talked to someone_i about himself_i. (Kuno 1987)
- (17) a. 花子_iが 太郎に 自分_iについて 話した。
 b. ??誰か_iが 太郎に 自分_iについて 話した。

someone や「誰か」のように、限定できない対象に視点を置くことは困難なので、これらの例は (13) によって説明される。

重要なことは、再帰代名詞の視点制約 (13) の違反は文の容認度を左右する「有標の（意図的）」違反であるということである。

3 逆行照応と「視点」関係

本稿で問題にしている心理動詞構文が目的語にとる経験者 NP は、心理

変化を被る主体であり、この構文はその経験者がどのような心理変化を被るかをあらわす。事態参与者の内的変化を認識していることを前提に発話されるこの種の構文は、話者がその参与者にきわめて近い視点をとっているからこそ可能となる。そこで次のように仮定する。

- (18) 心理動詞構文の視点関係：心理動詞構文は、目的語 NP に視点が置かれる。

この仮定がこの構文の逆行照応を説明することを見て行こう。

- (19) a. *Each other_i's teachers insulted John and Mary_i.
 b. Each other_i's supporters worried John and Mary_i.

(Pesetsky 1995)

問題の心理動詞構文 (19b) は、(18) の仮定によって、目的語 *John and Mary* に視点が置かれた文である。よって、

- (20) E (John and Mary) > E (supporters)

また、再帰代名詞の視点制約 (13) によって、

- (21) E (John and Mary) > E (supporters)

(20) と (21) は矛盾せず、(19b) が容認されることが正しく予測される。一方、心理動詞構文ではない (19a) では SSEH によって、主語に視点が置かれる。よって視点関係が (22) のように矛盾し、容認されないことが予測される。

- (22) SSEH: E (teachers) > E (John and Mary)

再帰代名詞の視点制約: E (John and Mary) > E (teachers)

目的語内に再帰代名詞を含む (23) が容認されないことも同様に説明される。(23) の視点関係を (24) に示す。

(23) *The students_i amazed each other_j's parents.

(Grimshaw 1990)

(24) 仮定 (18) により: E (parents) > E (the students)

再帰代名詞の視点制約: E (the students) > E (parents)

これは矛盾する関係であり、(23) が容認されないことを正しく予測する。

さて、心理動詞構文の逆行照応は日本語にも見られる。

(25) a. 自分_iの本が 太郎_jを 悩ませた。

b. 自分_iの生徒が 先生_jを 憂鬱にさせた。

これによって、(18) の仮定は日本語にも適用されることが分かる。これを踏まえて、次の例を見てみよう。

(26) a. [花子が自分_iに貸してくれた] 本が 太郎_jを 悩ませた。

b. * [花子が自分_iに貸してやった] 本が 太郎_jを 悩ませた。

詳しくは Kuno and Kaburaki (1977) を参照されたいが、「やった」は主語に、「くれた」は動作の受け手 (= 格名詞句) に視点を置く表現であることが知られている。したがって、(26) の各文の関係節内の視点関係は次のようになる。

(27) (26a): E (自分=太郎) > E (花子)

(26b): E (花子) > E (太郎)

本稿では (18) で、心理動詞構文は目的語に視点が置かれることを仮定したから、(26) の各文は「太郎」に視点が置かれた文である。よって、(28) が成り立つ。

(28) E (太郎) > E (花子)

(26b) では関係節内の視点関係がこれと矛盾し、容認されないことになる。

4 心理動詞構文と受身

Belletti and Rizzi (1988)、Grimshaw (1990) などによると、問題の心理動詞構文は動作受身をもたず、(29b) は、「形容詞受身」の解釈となる。

(29) a. The situation worried/concerned Mary.

b. Mary was worried/concerned by the situation.

この事実は本稿の仮定を支持すると考える。2.1 で述べたように、受身文は、通常の話順ならば視点の位置にない目的語 NP を、視点位置である主語位置 (SSEH) に置き換える有標の構文である。ところが、本稿では心理動詞構文は、目的語がすでに視点位置であることを仮定した。すなわち、非視点位置から視点位置への置き換え、という有標の構文を選択する動機が存在しないことになる。

高見 (1993)、柴谷 (1993) は受身文の機能に「主語の特徴付け」をあげている。「視点位置への置き換え」という動機が存在しなくても、「特徴付け」の機能を果たすため、形容詞受身文が存在するものと思われる。

5 結語

本稿では、(i) 再帰代名詞を話者の「視点」をあらわす表現である、(ii) 心理動詞構文は目的語に視点を置く、というふたつの仮定によって、心理動詞構文が典型的に示す「逆行照応」の現象が説明されることを示してきた。少なくとも項位置にない再帰代名詞については、その照応に「視点」が関係していることが明らかになったと思われる。

照応の問題には、意味的、談話的な要因が大きくはたらいており、統語論的分析とともに、さらに研究されなければならない。

注

- 1) 同様に c 統御関係によって説明するものに Belletti and Rizzi (1988)、Fujita (1993) などがある。c 統御条件の反例は Zribi-Hertz (1989)、Pollard and Sag (1992) に詳しい。
- 2) Uniformity of Theta Assignment Hypothesis と呼ばれる。
- 3) Kuno (1987) では「 \geq 」が使われているが、本稿の議論に直接関連しないので説明の都合上「 $>$ 」を用いた。
- 4) ただし、項位置にあらわれる再帰代名詞に視点の関与があるかどうかは明確ではない。Reinhart and Reuland (1993) などは非項位置のものを“logophor”として区別する。本稿では項位置にある再帰代名詞は今後の課題として対象外とする。

主要参考文献

- Belletti, A. and L. Rizzi (1988) “Psych-Verbs and θ -Theory.” *Natural Language and Linguistic Theory* 6: 291-352.
- Fujita, K. (1993) “Object Movement and Binding at LF.” *LI* 24: 381-388.
- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』東京：大修館書店。
- Kuno, S. (1987) *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Kuno, S. and E. Kaburaki (1975) “Empathy and Syntax.” *LI* 8: 627-672.
- Kuno, S. and K. Takami (1993) *Grammar and Discourse Principles: Functional Syntax and GB Theory*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Pesetsky, D. (1985) *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Pollard, C and I. A. Sag (1992) “Anaphors in English and the Scope of Binding Theory.” *LI* 23: 261-303.
- Reinhart, T and E. Reuland (1993) “Reflexivity.” *LI* 24: 657-720.
- Sells, P. (1987) “Aspects of Logophoricity.” *LI* 18: 445-479.
- 柴谷方良 (1993) 「認知統語論と語用論」『英語青年』 5: 5-7.

- 高見健一 (1993) 「語用論と統語論のインターフェイス：機能的構文論の立場から」
『英語青年』 5: 11-13.
- 高見健一 (1995) “Backward Binding and Empathy”. 上智大学言語学会第10
回大会口頭発表.
- Zribi-Hertz, A.(1989) “Anaphor Binding and Narrative Point of View:
English Reflexive Pronouns in Sentence and Discourse.” *Language*
65: 695-727.